

小笠原流礼法における胞衣についての研究

A Study on the ENA in the Ogasawara manner

陶 智子

SUE Tomoko

はじめに

出産儀礼において「胞衣」の取り扱いが重要なものであり、さまざまな作法があることについてはすでに指摘されるところである。胞衣に関する研究には、矢野敬一「誕生と胞衣」（『列島の文化史』4、一九八七年）、横井清『的と胞衣』（平凡社、一九八八年）などがある。しかし、特に小笠原流礼法書にみられる胞衣に焦点を当てたものはないようである。

出産儀礼に関しては、小笠原流礼法においても「嘉礼」として重視され、関連する礼法書もある。主なものに『産所道具巻』『産所諸用集』『胞衣納之巻』『産着伝記』『胞衣納伝記』があり、『女中十冊書』には「産所次第」が収録されている。これらにおいて胞衣の取り扱い、やはり重要視されるものである。そこで、本稿では、小笠原流礼法書にみられる胞衣に焦点を当て「胞衣」について考察を加えた。

一 小笠原流礼法

小笠原流礼法は、もともと男性を対象とする武家儀礼であり、弓や馬に関するものを中心とする。したがって出産関連の儀礼としては、古くは弓関連のものとして「暮目」があったといわれるものと考えられる。しかし、中世末、武田信玄に信州をおわれた小笠原長時は、礼法に深く関心を寄せたようで、さまざまな分野の礼法書の執筆に手をそめた。長時が伝えたものの、さらにはそれをもとに門弟筋のものが手を加えるなどして伝えたものが、先にあげた出産関連の礼法書である。すなわち本稿でとりあげる小笠原流礼法書とは、この系統のものであり、いずれも江戸時代初期の礼法家水嶋卜也（之成）を経て、その門弟筋に伝えられたものでもある。

礼法書には、巻末に、その伝書がどのような人々によって伝えられてきたかを示す、いわゆる「伝系」が記されることが多い。出産関連の礼法書にもそれが記されていることが多々あり、記されている場合は、小笠原長時から始まる。しかし、これらは必ずしも長時が伝えたものをそのまま伝えたことを示すものではない。伝えられた過程で、何らかの手が加えられている可能性もあるが、長時自筆のままとった伝書の存在が知られず、どこまでが長時が伝え、どこからが後に付け加えるなどされたかの判断はむずかしい。少なくとも水嶋卜也の門流では、このようなものが伝えられていたということはいふことができる。

二 胞衣桶

『産所諸用集 乾』（注1）には、産所に用意すべき道具があげられている。巻末に

すえ ともこ（幼児教育学科）

右一冊口伝等雖有之至于時初学之門弟依難働今爰ニ産所諸用集記
置者也

水嶋ト也之成

伊藤甚右衛門幸氏

同 隼太 幸充

同 将曹 幸督

同 隼太 幸辰

坂田段治 能賢

とあることから、小笠原流の伝書であることが知られる。それには胞衣関係のものとして次のものがあげられている。

一 御胞衣土器一ツ。五斗土器なり。

一 御胞衣桶曲物壱ツ。白絵、御紋。

一 胞衣盤一ツ。檜、白絵。是御臍緒を当申盤なり。

このうち「御胞衣桶」に関しては、『産所道具之巻』に絵が載る。

『産所道具之巻』は、産所で使用される道具の図をまとめた札法書である。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本には、巻末に

小笠原大膳大夫 長時

同 右近大夫 貞慶

とあり、小笠原流の伝書であることが知られる。それには、「公卿」

「篋」「胞衣桶」「押桶」「手水桶」「盥」「寄懸」「片高畳」「屏

風」などの図が載る。

「胞衣桶」の図には、

蓋ノ高サ九分 指渡七寸 高サ三寸五分

とある。これは、水嶋ト也が、女性のために編纂したと考えられる『女中十冊書』に所収される「産所次第」に次のようにあることと同じである。

一 糸な桶の事。高さ三寸五分、口の広さ七寸、ふたの高さ九分なり。鶴亀松竹をえがくなり。

ところで、水嶋ト也（之成）の高弟伊藤幸氏は、ト也没後、ト也より伝えられたことを記録したものだとして、いわゆる「之成伝記」を編纂する。おおむね記事が詳細になる傾向がある。その「伝記」の一つに『産所道具伝記』がある。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本の巻末には、元禄十一年三月二十七日の「伊東甚右衛門幸成」の跋がある。「伊東甚右衛門幸成」とは伊藤幸氏と考えられる。同書は、先にあげた『産所道具之巻』でとりあげられた道具についての「解説書」ともいうべきもので、胞衣桶については以下のようにある。

一 胞衣桶ハ曲物也。蓋ニモ廻リニモ鶴亀松竹ヲ白画ニ画也。寸法、指渡七寸五分。カヤウニセネバ五計土器ガ中ヘ入ラヌナリ。高サ三寸五分。蓋打キセニシテ九分也。七寸五分。七寸ハ七曜、五分ハ五星ニ表ス。高サ三寸五分ハ三方五行ニ比ス。蓋ノ九分ハ九曜

ニ表ス。又指渡し六寸四分ニモ六分ニモスル。六寸四分ハ六十四ケ国ニ表ス。六寸六分ハ六十六ケ国ニ比ス。日本ノ州、数、初メハ六十四ケ国ナリ。後ニ壱岐対馬ノ二嶋ヲ入テ六十六ケ国アリ。

他流ノ一説ニ、胞衣桶ヲユタカ筥トモ申ス也。蓋ニ、男子ニハ内戚ノ名字ヲ、女子ナラバ外戚ノ名字ヲ太ク画テ、側二年年月日ヲ画ク也。他流ニ友引ノ方ヘ納ル伝モアリ。

これまで紹介したものに比較して詳細な記述である。

指渡の長さが、七寸五分となっており、少し大きい。これは「五計土器」すなわち「胞衣土器」が入らないとする、実用的な面があると同時に、数字に意味を持たせるため、高さに照応させたのではないかと思われる。こうした数字に意味を持たせることは、指導の上では意義深いことであつたと考えられるが、その一方で、小笠原流が細かなことまで決められた堅苦しいものというイメージ形成の一因となつたことは否めまい。

なお小笠原流の礼法書の一つ『故実拔要口伝』には次のようにある（本文は架蔵本による）。

一胞衣桶寸法之事。指渡し七寸五歩、高さ三寸五分と古法にいへども高さ五寸よし。蓋打きせにして、蓋の縁幅を九分にして、鶴、亀、松、竹、家の紋白絵なり。口伝。

一胞衣土器の事附産石の事。ゑな人の土器とて五斗土器を一重なり。是も白絵なり。此土器の中へ、ゑなを水にて洗ひ、酒にて洗、紙にて包、土器の中へ入、五斗土器を蓋にして、青絹にて

包、胞衣桶へ入、昆布、栗、熨斗蛇を添、ゑな桶の蓋をして上を白布にて結、箱に入納るなり。産石は青めの生石、丸きを用ひたるがよし。石にも白絵なり。包む土器の中へ入、五斗土器も包たるが能なり。条々口伝。

大方は同じで、次にとりあげる『胞衣納之巻』『胞衣納伝記』の記述ともほぼ同じであるが、異なるのは、高さを「三寸五分」とするのは「古法」であり、今は「五寸」とするとある。古いからといって、それを必ずしも守らなければならないというのではなく、実用にあわせて変化させたことがうかがわれる。

三の一 『胞衣納之巻』『胞衣納伝記』

『胞衣納之巻』は、小笠原長時が武田信玄に信州を追われた際に、長時の側近くで礼法を学んだとされる岩村意久の伝書の一つである。岩村意久については生没年など不明である。岩村が伝えた伝書の全体像は不明だが、水嶋ト也を経て門流に伝えられていったものがあり、『胞衣納之巻』はそのうちの一巻である。またこの巻に関しての「之成伝記」にあたる『胞衣納伝記』もある。以下ははじめに『胞衣納之巻』の当該記述箇所を翻刻をあげ、『胞衣納伝記』を参考にしながら、胞衣納の手順についてみていく。なお二点ともに東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本を使用する。

三の二 胞衣の洗い方など

一胞衣納様の事。水を洗ひ、其後酒を以てそ、ぎ、蝶紙にて包、土器に入、蓋をして青絹にて包。桑の小弓、蓬の箭、昆布、搗栗、熨斗を添、胞衣桶に入、白布にてゆひ入、箱に入ぬる也。

この条に關しての『胞衣納伝記』の記述は、以下のように特に詳しい。

一胞衣納ル作法。五撰三鎮ト云事アリ。五撰トハ宿ト日ト時ト方ト地ト也。三鎮トハ地ト衣ト法ト。吉水ニテ洗ヒ、吉衣ニテ包。大人ノ胞衣ハ盤ニ水ヲ入テ能産塩ヲ洗ヒ落シ、其水ヲ捨テ、又其上ヲ酒ニテヨク洗ナリ。水ニテ不洗。産塩ノ俣ニテ納レバ胞衣早ク朽ルユヘナリ。酒ニテ洗ハ湿ヲ除ン為也。酒ニテ濯ヒテ能滴リヲ取テ蝶紙ニテ包、土器ニ入テ、土器ヲ蓋ニシテ、其上ヲ青キ絹ニテ包ミ、胞衣桶ヘ入レテ、桑ノ小弓、蓬ノ矢二本、熨斗、昆布、栗ヲ添テ蓋ヲシテ、上ヲ白布ニテ結テ箱ニ入レテ、釘ニテ箱ノ蓋ヲシメテ能キナリ。胞衣ハ元氣ノ被キ物ナレバ大事ニシテ納メタルガヨシ。早ウ速ニスベカラズ。古法ニモ然リ。

師伝ニ、弓矢ハ胞衣ノ惡難ヲ防ン為也。胞衣ノ難ヲ防ゲバ子ニ災ヒナシ。

(中略・弓矢の作り方)

桑ノ木ハ、古語ニ、日ハ桑ノ中ヨリ出、月ハ蓬ノ中ヨリ出ルトアレバ、日月ノ恵ヲ受ル理モアランカ。天竺、震旦ヨリハ、我大君ノ国ハ東ニ当リテ、日月ノ出玉フ最初ナレバ、日本国トモ東海扶

桑国トモ蓬葉宮トモ支那ヨリ名付シトイヘバ、如此ノ道理ヲ取テ風土ノ古実トナレルカ。又是ニ墨、筆一対何モ紙ニテ包テ添タルモアリ。不添トモ可ナランカ。若シ添ハ祝ノ絵樣アル墨ト白軸ノ筆然ルヘシトノ事也。鳥ノ跡モ不絶、天地泰ヤカナルト云古語ニヨリテヤ。追テ考ヘシ。其外ノ種々ノ祝ハ古事、四季法礼(註・小笠原流ノ礼法書)ヲ考ヘシ。

或時、師(註・水嶋ト也)ノ閑居ノ時ニ、胞衣ヲ納ル時ニ下ヲ青キ絹ニテ包上ヲ白絹ニテ包事如何ト問。先生ノ曰ク、吾子ガ尋ル処ハ、青キハ東方ノ春ノ色ニテ陽ナリ。白キハ西方ノ色ニテ秋ハ陰也。陰ナラバ下ヲ白絹ニテ包テ上ヲ青絹ニテ包ヘキ云。不審ニ聞ヘタリ。左ニ非ズ。懷妊シテ三月ノ内ハ胞衣青色ニシテ鶏卵ノ形チナル元氣ヲ覆フ。是初月ノ胞衣ノ色也。十ヶ月ニシテ胞衣白色ト變シ、形容ヲ震フ。此理ヲ以テ古人下ヲ青色、上ヲ白絹ニテ包ト伝ヘラル。意味深甚ナル事ヲ味フベシ。

又序ニ秘事ヲ教ベシ。大人ノ方妻妾ノ外ノ下部ニ御手ニツケサセ玉ヒ、身籠リテ、貴人ノ子、野父ノ子ト異論甚キ時ニ、其胞衣ヲ洗ヒ見ベシ。果タシテ父ノ紋アリ。古歌ニ

胞衣絹ニ其家々ヲ顕スヲ心ヲツケヌ人ハヨシナシ

此古歌アルハ此故也。是ハル爰ノミニ非ズ。余ニ用ユル秘事アリトノ事也。カヤウノ事モ師伝ナレバ残スベキ事ニ非ズ記シ置ナリ。

胞衣の洗ひ方、桑のこと、胞衣を包む絹の色についての師の説、さらには胞衣を使った子の判別のしかたなど、多くのことが記されている。

三の三 胞衣を納める方角

一 胞衣納る方角の事。其年の玉女の方の地三尺掘納也。男子は左の足を以三度、女子は右の足を以て二度地を踏で、天長地久御願円満此土隠（割注・男子の胞衣／女子の胞衣）と唱、其前脇をほり納べし。

一 何れの伝とはしらね共、産所の下に胞衣を埋と云伝有。然といへども家流に非ざればわきまへがたしといへり。

一 獣のほらぬ所に納べし。若掘出せば其子顛狂ならしむ。虫さし喰時は悪瘡たへず。烏鵲食すれば死をにつむ。神社墓所と竈などの辺に納る時は其子盲目となる。流水の地辺に納る時はかならず水に溺て死。井辺水出候所に納る時は聾と成。道の辺は果報つたなしといへり。然るときは能々所を撰納べきなり。

一 上古の伝に大人高位の胞衣は桶箱に納、高き所に置。誕生の日、神酒供御を備る也といへり。

「玉女の方」とは、幸運をもたらす玉女のいる方角のことである。小笠原流礼法では、方角を考慮すべきときに「聞神の方」とともによく用いられる方角である。玉女の方とは、寅の年ならば九つめの戌の方角がそれにあたる。江戸時代末に発行された暦などには、「三鏡宝珠形」といわれる絵像が付されることが多く、中央を「天星玉女」、左を「色星玉女」、右を「多願玉女」と称する。玉女の信仰の一端である。

深さは三尺とあるが、『胞衣納伝記』では、数字に意味をもたせるために「三尺六寸」とある。「地ノ数六々三十六ヲ表」とあるが、根

拠は不明である。

また地を踏むことは、地中の虫を、殺さずに払うためとされる。

「天長地久」云々は祝言であるが、『胞衣納伝記』では、次の説を紹介する。

天は父、地は母の意味で、父母も長久に、この土も安穩に、この嬰兒の胞衣も堅強であれという祭文である。また上古は、大人の胞衣はやまに納め、陰陽頭が祭文を読み、散米、神酒を地に供し、鳴弦の役が弦を鳴らす例があった。また他流では閨の下に納める。

また重要なのは、内にしても外にしても清地をえらぶことであるが、鬼門・金神の方角は凶であるとされる。金神は、歳徳神と対をなし、歳徳神のいる方角は縁起のよい方角、それに対して金神のいる方角は悪い方角ということになる。

獣が食べると、子が驚き、胞衣という元気の被物の犯すことになるから、「顛狂」になる。虫が刺し通すと子に響くから瘡となる。鳥類が掴んで食べると病死のときに死想が悪い。神社、墓所、竈のあたりは神仏をけがすから盲目となり、川のあたりは水に引かれて水死し、井のあたりは湿のために腐るから耳を煩い聾となる。道のあたりで神仏などを汚すことがあれば果報はない。『胞衣納伝記』では、以上のように説明を加える。

一見、こまごまとしているようだが、具体的に記し、その理由をあげることで正当性をもたせているのである。

三の四 胞衣納の由来

一人王十五代神宮皇后異国退治の御時、筑前の国三笠の郡におゐて

応神天皇を降誕したまふ時、胞衣を箱に入納給ふと也。今の箱崎の八幡宮是なり。誠に濁世末代の凡下たりといふとも妄に納まじきは胞衣也と云々。

神功皇后が妊娠中に三韓退治をし、帰陣して応神天皇を生んだという伝説が紹介される。物事の由来は古いことがよしとされる傾向があり、この伝説は、「岩田帯」の由来などにも利用される。『胞衣納伝記』では、応神天皇は豊前の宇佐八幡宮で生まれ、長寿を保った伝説と、京都東山の吉田神社が八百万の神の産神なので、応神天皇の胞衣は吉田神社のほとりに納めた説などが紹介されている。

おわりに

人間が子を生む「出産」という行為は、生物が種の保存のためになされる「自然」なものであると同時に、現代の日本においては、薬等を使用すれば出産日がある程度決められ、また出産方法を選択でき、さらには避妊、堕胎などといった形で、それを拒否することもできるという点で、きわめて「人為的」なものでもある。人為的なものであるれば、そこには当然ながら文化がある。

『女大学』にとりあげられた婦人に関する事項の一つに「七去」がある。夫が妻を離縁する七つの理由である。その一つは「子なき女は去る」である。「家」の存続が重要であった時代には、家を継ぐ子が必要とされた。これは、女性が、男性の庇護のもとでくらすためには無事な出産が条件であったことを意味している。こうした後継者が必要される社会、文化では、出産にまつわる儀礼的なことが行われ、そ

れにはまた、無事成長することを祈念するために、呪術的な行為が含まれる。小笠原流礼法における出産関連のものは、今日の医学的観点からすれば無意味なものも多いと思われるが、文化的にみた場合、当時の文化をうかがい知ることができる貴重な資料といえよう。

(注1) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。川瀬康子「東北大学附属図書館狩野文庫所蔵「産所諸用集」」(『歴史情報6』二〇〇三年三月)に翻刻される。

(付記) 本稿をなすにあたり、貴重な資料の閲覧を許された東北大学附属図書館に厚く御礼申し上げます。

本稿は財団法人富山第一銀行奨学財団の研究助成によるものである。